



渡辺 満さん・ルメ子さん(権現堂)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 掃部・古山
取材日：10月30日

浪江町のためにも若い人が働ける場を

渡辺満さんとルメ子さん夫妻は、JR浪江駅近くで息子さん（三代目）と会席、割烹、食堂「都」を営んでいらっしゃいました。名物のB級グルメ「なみえ焼そば」が食べられるお店としても知られ、観光バスでやってくるお客さんにも好評だったそうです。

現在は、あさか野バイパスと郡山コスモス通りに挟まれている郡山市静町に居を構え、夫婦水入らずでお暮らします。ルメ子さんの今の楽しみは、復活した7区の女性たちの集まり「菜の花会」で出かける旅行。今年は、12人で岳温泉に泊まり親睦を深めてこられたそうです。一方、満さんは趣味のゴルフやマージャンを存分に楽しんでおられるとのこと。



▲満さんとルメ子さん。お話は尽きず、ついつい長居をしてしまいました。

◆津島から郡山、そして埼玉へ
大地震の後、最初に向かったのが高瀬球場でした。そこで「請戸の方は津波で何も無い」という話を聞きました。寒いし、暗くなってきたので一旦、自宅に戻り翌12日、お父さん（夫の満さん、以下同じ）と息子と3人で津島に向かいました。津島の避難所はどこも一杯で、戸惑っていたら息子の友人からもっと遠くへ避難するようにと電話がありました。郡山の義妹宅を目指すことにしました。その前に血圧の薬をと思って診療所に寄ったら1週間分くらい渡されました。明日にでも自宅に帰るつもりでしたので「なぜ？」と思いましたが、途中で、白い防護服を着た人

◆浪江を思わない日はありません
平成23年5月、埼玉から横間温泉に引っ越し越して仲間100人と暮らし始めました。飯館村の方々も避難して来られ、みんなで交流したんです。お父さんは、自治会長を引き受けて支援物資の調達に奔走しまし

た。遠方から物資を届けに来てくださる方もいてねえ。そういった方たちとは、今でもお付き合いを続けています。

◆忘れられない娘の機転と郵便局の温情措置
埼玉で困ったのはお金でした。何しろ着の身着のまま来たので。お父さんは免許証を持ってたけど、私は何もなかった。娘の機転と郵便局の温情で救われました。実は、平成22年うちの店が福島民友新聞で紹介されたことがありました。私たちの写真入りの記事を娘が持っていて、それを見せたら本人と確認していただき通帳の再発行ができました。その後、息子は単身でいわきへ。今も息子はいい感じです。

◆忘れないでほしい
平成23年8月、郡山市西田町のアパートに引っ越ししました。大熊町や富岡町、津波で自宅を流された人も住んでいて、隣近所仲が良かった。毎日散歩したり、デコ屋敷に行ったり、今思うと楽しい日々でした。やがて「家を買った」とか「家を借りた」とかいう話が聞こえてくるようになりました。私たちは当初、埼玉にいたので町の状況がよく分かっていませんでした。「もう浪江には帰れない」みたいな雰囲気もあって、平成26年3月にこの家を求めました。

◆浪江町には雇用の創出を期待しています。お父さんは、今も店・事業をやってみたいと言っています。若いうちから働けるような場所ができることを願っています。

◆浪江を思わない日はありません
浪江町には雇用の創出を期待しています。お父さんは、今も店・事業をやってみたいと言っています。若いうちから働けるような場所ができることを願っています。

浪江のこころ通信

第79号

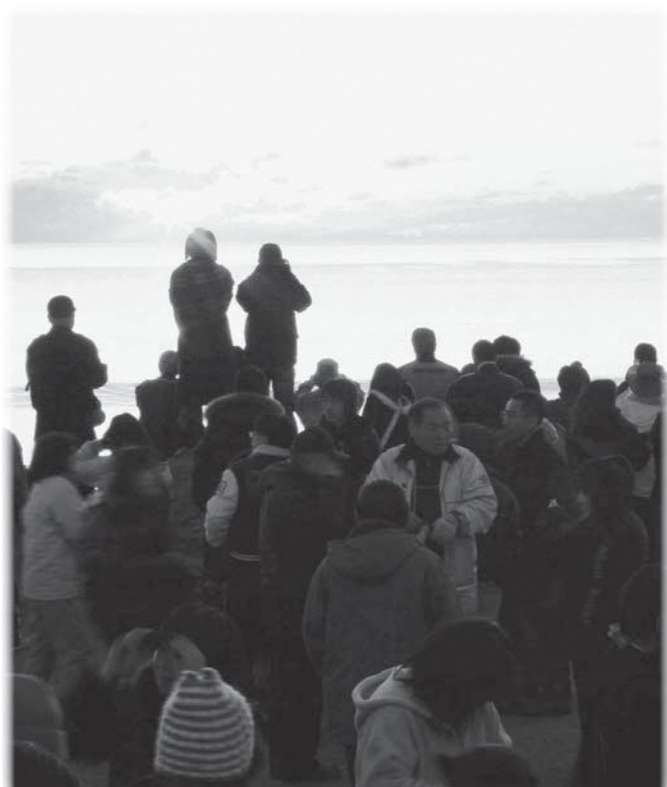
平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散避難をしています。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるため一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されています。

この「浪江のこころプロジェクト」は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第79号への感想をお寄せください。
【連絡先】〒979-1592 双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2 「浪江のこころ通信」宛 FAX.0240(34)4593

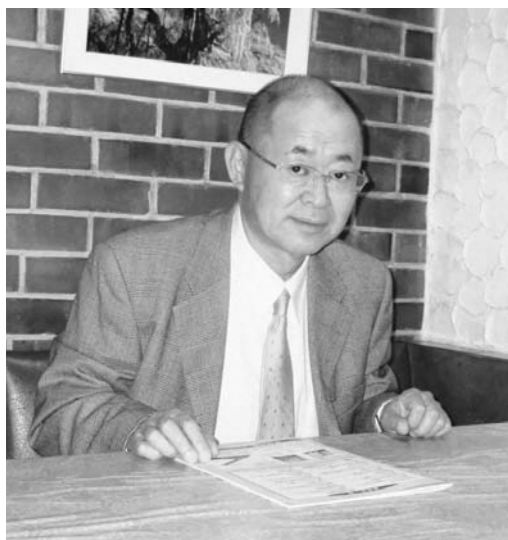




佐藤 実さん(酒田)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島
取材日：11月1日

いずれは浪江に戻りたい



▲原ノ町駅近くの喫茶店でお話くださる佐藤さん

いわき市に避難中の佐藤さんは今年、平成30年に還暦を迎えます。現在、平日は南相馬市で単身赴任生活、週末はご自宅でご家族やお孫さんと楽しく過ごされていますが、「家内とも同郷の友人とも、何を話していても最後には浪江の話になる」とのこと。「とても語り尽くせない」という浪江への思いをお話してくださいました。

◆3月15日にいわき市に避難
私はいわゆる会社人間で、震災が起こった時も非番だったんですが、翌日には南相馬市の職場に出勤し、社員の安否確認などを行いました。それから職場が閉鎖されることになり、平成23年3月15日に家族といわき市に避難したんです。当時、大学生だった娘がいわき市のアパートに住んでいたのですが、そこに転がり込むという形で、その後、娘は結婚して孫も授かりましてね。私のほうはその年の12月に職場が再開したので、平日は南相馬市で単身生活、週末は家内と両親の住むいわき市の家で過ごしています。一人暮らしで多少の不便はありますが、南相馬市

◆いずれは浪江に戻りたい
職場の同僚とも、泣いたり笑ったりしながら震災当時のことをよく話します。みんな、避難した時はすぐに浪江に戻れるだろう

◆浪江の自宅跡に通う日々
元々住んでいたのは酒田地区で、浪江高校の近くです。川沿いで地盤がやわいため建屋が大きく損傷し、今は整地して植木くらいしか残っていません。家を取り壊す前は、時間があるかぎり家に戻って写真を撮りました。集落の様子を眺めているだけでも気持ちが悪く落ち着くので、今も時々車で部落を一周します。幼なじみの数人は昼間だけ浪江に戻って農業をやっているから、今日は来てるかなって覗いたり、昔学校に通った道とか友達と遊んだお寺さんとかを回ったり。

孫は今1歳2か月で、私の顔を見ると「抱っこ」とせがむんです。はい、可愛いですよ(笑)。子供世代、孫世代が誇れるようなふるさと・浪江を取り戻せたらと心から願っています。

家内ともいろんな話をしますが、最後には浪江の話になって「いずれは帰るよね」と確認し合ってるんです。実際にどうなるかは分かりませんが、孫が中学校を卒業する頃、自分たちが70歳過ぎる頃に戻れるといいねって。役場の方は本当に一生懸命やってくれていると思います。それでも復興にはまだ時間がかかりそうですね。壊れたままの建屋もまだ目立つので、特に駅前をもっと明るい雰囲気にしていただけるといいなと思います。そして高齢者の住民も暮らしやすい環境が整い、将来的には孫が戻ってきて安心して遊べるような場所ができたらと。



山田 千鶴さん(権現堂)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・掃部
取材日：10月30日

自然豊かな福島「この新しい家」で生きていきます

東北自動車道郡山インターチェンジから郡山市内に向かう国道49号と市内環状線「あさかのバイパス」の交差点から程近い閑静な住宅街に、山田さんが経営する美容室「すずらん」があります。お住まいと一緒に真新しい建物で「ここで今年初めての冬を迎えるのが、ちょっと心配」と笑っていらっしゃいました。

お店は毎日営業。山田さんは「車を使わない近所の方々、特に高齢者の方に利用していただきたいと思っていますし、気軽に立ち寄れる居場所づくりもできたら」とおっしゃいます。現在、美容専門学校に通う娘さんが卒業を迎え、母娘と一緒に立ち働く様子を見ることができるとも近いかもしれません。



▲山田さん(左)と、取材の時に遊びに来られていた、幼馴染の八橋久枝さん(右)。八橋さんは浪江町生まれ。双葉町に嫁ぎ、現在は福島市在住。偶然、遊びに来られていました。

◆東北地域を転々とし、川崎市で暮らして約6年
震災が起きた3月11日は、遅めの昼食をとりながらテレビを見ていました。突然の揺れに、大型テレビを押さえながら、2階のたんすが崩れたらどこへ逃げようかなどと考えていました。当時、小学校3年生と6年生の娘たちが通っている近くの小学校に駆け付けられるために外に出ると、ほこりとガスの臭いがして、3軒隣の家は大きく傾き、水道管が破裂していました。子供たちは校庭に避難して無事でしたが、娘たちは「机ごと傾いたのが怖かった」そうです。ほかの子供たちの保護者がみえるまで小学校にいた後、自宅に戻ると、仕入れに行っていた2軒隣の小料理屋さんから津波を見た

◆私たちの新しいふるさとが、「こ」
娘たちの進学のこともあり、福島に戻りました。郡山市を選んだのは、市内に浪江町の人も多いし、二本松市

という話を聞き、父と娘2人を連れ、財布だけ持って上ノ原の叔母の家に避難しました。仕事中心だった夫とは、夜に合流できました。翌朝、津島の体育館へ向いましたが、途中でキノコ雲を見ましたが、もっと遠くへと思いい、川俣町の小さな体育館に。余震で揺れる度に外に出ましたね。ガソリンが少なかったので南相馬市の夫の姉や飯館村の姉の親戚宅にもお世話になりました。その後、神奈川県川崎市の妹のところへ避難し、近所の市営住宅に入居して約6年を過ごしました。福島から避難した人たちも同じ団地に結構いらっしやいましたが、交流はあまり無かったです。その間、美容師をしたり、ヘルパーの勉強をして介護施設で働いたりしました。仕事は思ったよりハードでした。単身赴任が多かった夫は家族と暮らすために、一緒に介護の仕事をしました。今は設備関係の仕事をしています。

私にとってもふるさととは、あつて無いようなものです。でも、川崎市に住んでいた時は季節感もなく、ただ空白の時間だけが過ぎたように感じています。時間の経ち方も人の動きも、全く違いました。一番の楽しみはママさんバレーでしょうか。年1回の浪江町長杯バレーボール大会で浪江町のバレーボール仲間に出会えるのが楽しみで続けています。

や本宮市に友人知人が多く、首都圏に行くのも便利だと思っただけです。土地を探して約1年、自宅兼美容室を建てました。私も昔からのお客様も浪江のお店のイメージが強いだけに、どうやって皆さんが入りやすいお店にしていけるかがこれからの課題ですね。



美容室「すずらん」
営業時間：9時～19時
毎週月曜日、第1・第3日曜日は休み
TEL 070(2039)8787



ともに生きる会

代表 **森川マツ子**さん(加倉)
岩崎 弘子さん(川添)・**佐藤 恵**さん(請戸)
熊川 善雄さん(権現堂)・**犬丸富美子**さん(富岡町)

取材者：特定非営利活動法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：10月10日

帰った人にも、戻れない人にも誇れる浪江町に



▲左から、熊川さん、岩崎さん、森川さん。



◀この日のプログラムは「トートバッグづくり」。指導する佐藤さん。



▲地元の銀行に「粘土教室」の作品が飾られました。

なっているもので、一緒に、福島に戻ること考えています。「ともに生きる会」には、最初から関わって来ました。やっぱり、浪江の人同士だと本音で話ができます。今のこと、将来の暮らしを相談するのは、「ともに生きる会」の仲間たちです。
熊川さん 震災前は、父親から引き継いだ「大室屋」で終日、厨房に立っていました。町では、みんなが知っている店で、結構賑わっていました。震災から6年半。元の場所で、店を再開することは考えていません。前のような賑わいが戻ってくるとは思えませんし、心臓のバイパス手術を受けて、体力に自信もなくなりしました。「ともに生きる会」の企画には、ほぼ毎回参加しています。ほかの場所だと、賠償金の話になることが多いので、気重になってしまふことが少なくありません。ここだと、みんなが好きなことをして、お昼を食べて、気楽におしゃべりして、ゆつくりできる。有り難いですが、千葉での暮らしも長くなつたけど、近所付き合いのある人は2〜3人で、浪江での暮らしとは比べようもありません。震災前から、収集していた骨董品が生きがいになっていいます。浪江にいた時には、参加で



▲松戸の支援者の方たちも一緒に、「お好み焼き」を囲んで、おしゃべりを楽しむ。

きなかつた東京での甲冑の審査会にも、参加できるのはうれいですが、甲冑仲間も何人かいて、励みになっています。
犬丸さん 次男と埼玉で、一緒に暮らしています。「ともに生きる会」の企画には、毎回、電車を乗り継いで来ています。皆さんに誘ってもらえて有り難いです。近所で、おしゃべりできる人はなかなかいません。こうして、皆さんの顔を見ると安心します。
◆**ともに生きる会の今後**
森川さん 「ともに生きる会」の事務所兼交流スペースの家賃の負担を考えると、長くとも、あと2年くらいかなと思つていますが、今すぐに、浪江町に帰ることは難しいと思つている人が多中、同じような状況にある町民同士が本音で話ができる場は大事だと感じています。松戸市民の人たちと避難している町民が、力を合わせて「ともに生きる」ことを実現できればと思います。
常磐道を通り広野辺りに差し掛かると、ホッとする自分があります。心が癒されるのか、都会での生活の重圧を和ませることができ

「ともに生きる会」は、平成27年7月に、千葉県松戸市に避難している森川さんや浪江町民、富岡町などの他市町村の方と、震災直後から、支援活動を行ってきた松戸市民の皆さんと一緒に立ち上げました。

名前のお通り、避難者と支援者が一緒になって、バス旅行や手芸の会、手作り品の販売などを企画・実施しています。森川さんが、以前に借上げ住宅として住んでいたマンションの一室を使用し、心地良く、賑やかな笑い声が絶えない「居場所」ができています。

代表の森川さんと参加された皆さんに、今の暮らしと、今後についてお話いただきました。

◆**今の暮らしと**
森川さん 震災後2年くらいの間は、避難指示区域外の方たちとも一緒に、いろいろな企画をやっていたのですが、時が経つにつれ「あの人たちは、東電の賠償や国の補償があるからいいよね」といったことが耳に入ってくるようになったんです。国や東京電力が決めたことで、自分たちでは、どうしようもないことと分かつていても、お互い感情的になってしまいます。境遇の違う人たちが一緒に活動する難しさを感じていたところ、応援してくれていた松戸市民の方たちから、新たに団体を立ち上げたらと勧められ、「ともに生きる会」を立ち上げました。
岩崎さん 松戸市常盤平で暮らしています。震災の1〜2年前に両親は亡くなり、夫婦二人の

生活です。震災後の避難生活を思うと、両親には、大変な思いをさせなくて良かったかなと思います。松戸の暮らしにも、何とか慣れてきました。以前のよう、「お茶飲み」したりすることは、ほとんどありませんが、それも当たり前になってしまいました。長男も、こちらで就職が決まりました。浪江に帰る機会も少なくなり、お墓もこちらに移そうかと考えています。
佐藤さん 次男夫婦と一緒に、印西市で暮らしています。二世帯住宅を建ててもらって、恵まれていると思えますが、震災があつての同居で、お互いに気まぐずなることも少なくありません。長男が、福島県内の復興公営住宅に入居申込みをしていて、来年には引っ越し予定に

「ともに生きる会」の定例企画

- ★1月10日(水) 10時～ 話しずっぺ会
気軽に話しをしながら楽しもう
- ★1月12日(金) 10時～ 粘土教室
誰にでも出来る手に優しい粘土教室「クリスマス・お正月に向けた作品づくり」
- ★1月20日(土) 10時～ 「手作り品販売会」
会場：五香駅(新京成線)西口
販売品：ピーズ小物、バック、帽子、ストラップ、手袋など